東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第四十八卷 第一號

昭和十四年一月

經濟論叢 毎月一日發行
第四十八卷第一號 昭和十四年一月一日發行
大正四年六月二十一日第三種郵便物認可

作田博士還曆記念論文集

（禁轉載）

目次

作田莊一博士肖像……卷頭

作田莊一博士稿「日本經濟學の正體」……一

日本的學問の文化史的意義及び基本的諸典型……文學博士　米田庄太郎……二

東亞民族の形成……文學博士　高田保馬……三八

日本經濟史研究の發展……經濟學博士　本庄榮治郎……五六

理論學としての日本經濟學……經濟學博士　谷口吉彦……七四

產業組合の耕地管理……經濟學博士　八木芳之助……九二

印度に於ける國民的產業能率の遲滯性に就て……經濟學士　大塚一朗……一〇八

「日本的」なるものゝ意義及び探求に就て……經濟學士　中川與之助……一二八

資本主義と支那事變……経濟學士　柴田　敬…一四二
明治時代農村手工業の消長……経濟學士　堀江保藏…一六二
我國に於ける預金通貨統計の發達……経濟學士　中谷　實…一七八
保險思想の發展……経濟學士　佐波宣平…一九三
歴史學派に於ける國民經濟の概念……経濟學士　白杉庄一郎…二二一
日本共同體經濟學の建設者佐藤信淵……経濟學博士　石川興二…二三七
國事資金法の提案……経濟學博士　小島昌太郎…二四九
農山漁村財政の五箇年記錄……経濟學博士　汐見三郎…二六九
支那の社會成層……法學博士　財部靜治…二八八

歴史學派に於ける國民經濟の概念

白杉庄一郎

一

學史的にみて、國民經濟といふ言葉が何處に由來するものであるかを今直ちに斷定することは出來ないけれども、然しそれがドイツに於て特に歴史學派の人々によつて强調されたものであるといふことだけは確かである。歴史學派は少くとも近世以後の人間の經濟生活が具體的には國民經濟に於て可能であると考へ、經濟學的認識はこの觀點に於て初めて眞實であり得ると信じ、その對象を專ら國民經濟に限定したのである。言ふまでもなく歴史學派は先づ古典學派との對立に於て成立した。古典學派は一部の人々が考へた如くには國民的觀點を離れて成立したものではないが、然し謂ふ所の國民が非歴史的に、從つてまた個人主義的・原子論的に把握されてゐたこと、その結果國民的なものは世界的なものに對して最初から矛盾することなく直接に調和的なものとして捉へられてゐたことは爭はれない。これに對して歴史學派は世界的なものが國民的なものと必ずしも直接には一致し難い樣な現實を地盤として成立した。そこでは國民的なものが世界的なものに對して優位を獲得しなければならなかつた。この故に歴史學派は古典學派に對して自覺的に國民經濟をその對象として取上げたのである。のみならず、國民經濟として捉へられた近代經濟制度の發展は不可避的に階級對立を激化し、思想的には古典學派の發展

として社會主義を生出した。社會主義は何れの國にもましてドイツに於て優勢であつた。これに對して歴史學派は、國民體をその階級的解體から守り、健全な國民經濟の發展を圖るために、階級を超えた國民的なものを確認し、經濟生活が具體的には國民經濟として存在することを强調したのである。かくの如く歴史學派は飽くまでもドイツ的現實に立脚してはゐたが、だからといつて一般的性格をもたぬ譯ではない。從つて國民經濟といつたものを考へて行くに當つて歴史學派の見解は參照さるべき一の有力な手がかりたることを失はないであらう。而して歴史學派の見解を明かにするに當つて、その批判者カール・メンガーの解釋と批判を參照すれば興味ある對照的效果が得られるやうに思はれる。この見地から歴史學派の國民經濟概念を中心とし、それにメンガーの見解を對照して以下若干の考察を試み度いと思ふ。

二

では歴史學派は國民經濟を如何に概念したであらうか。勿論一纏めに歴史學派と言つても、舊歴史學派及び新歴史學派の區別があり、その中でも個々の學者の見解の間には種々色合の相違がある。然し少くとも次の點に於て彼等の見解は大體共通なものをもつてゐた。第一に、國民經濟とは近世以來の國民國家の內部で且つそれと共に發展して來た近代經濟制度のことであるといふこと。第二に、國民經濟として捉へられる近代經濟制度は、國民生活の一部分卽ちその經濟的側面として國民的に統一されてをり、この國民的統一の側面からみて一の全體であるといふこと。一口に言へば、國民經濟とは國民的に統一された一の全體としての近代經濟制度のことであつた。

先づ、國民經濟は歴史學派に於て全く歴史的な概念であつたことは注意を要する。近代經濟制度が國民經濟として捉へられたのである。從つて近代に於ける各國民の經濟制度が別の觀點から資本主義的として捉へられるとすれば、所謂國民經濟は資本主義的國民經濟の謂ひであつた。別の言葉を用ふれば、それは市民的國民經濟とも言ふべきものである。而してこの點に關する歴史學派の功績は、資本主義的として特徴づけられる近代經濟制度が國民生活の一部分であり、國民的なものを前提とし、それと不可分の關係にある統一的全體であることを認識した點にあると言ふことが出來よう。要するに、近代經濟制度の國民的に統一された一の全體としての側面、それが歴史學派に於ける國民經濟概念の核心をなしてゐたのである。

然らば歴史學派は如何なる意味に於て近代經濟制度が國民的に統一されてゐるとみたのであらうか。シュモラーの所說を手がゝりとして若干の考察を進めよう。彼は國民的統一の契機を凡そ三に纏めてゐる。國民精神・國民的分業並に交換・法律其他の國家施設がそれである。先ず國民精神による統一について。

「國民とは言語と血統・風習と道德・多くはまた法律と敎會・歴史と國家組織によつて統一された多數の人間であつて、それらの人々は自分の內で他の諸國民の成員とよりも千種萬樣に緊密な紐帶によつて結合されてゐる。」

この紐帶は以前は家族・村落・種族等の成員間にのみ存在したのであるが、今日では國民なるものゝ成員間にも發生し、而も極めて多種多樣となつて、統一的な所謂國民精神が生成するに至つた。

「國民精神 (Volksgeist) は統一的な風習・努力及び意志活動に自己を表現し、その經濟的側面についてもまた、總ゆる又は大多數の個人の行動を支配する。」

勿論社會の精神生活の統一的側面は必ずしも國民生活に限らない。それと並んで或はより廣い——國際團體 (Völkergemei-

1) G. Schmoller, Volkswirtschaft, Volkswirtschaftslehre und -methode. Handwörterbuch der Staatswissenschaften. Hrsg. von J. Conrad etc. 3. Aufl. Bd. 8. S. 427-30. 戸田武雄氏譯、國民經濟・國民經濟學及び方法、3-11頁。

nschaft)――或はより狹い圈がある。然し國民圈こそが差當り規準的なものである。

「より高い意味に於て國民について語られる場合、かゝる半ば無意識的にして半ば意識的な・統一的命令なくして統一的に働く力が考へられてゐるのである。この意味に於て國民經濟もまた心的諸力及びその集中と一致に基く統一體である。」

かくの如く統一的な國民精神が各人の經濟行爲を支配し、その精神的統一の側面からみて國民經濟は一の統一體だといふ譯である。その際シュモラーが國民そのものと國民經濟との直接の關係を問題にせず、國民精神と國民經濟との關係について語つてゐることは注意すべきであらう。卽ち國民經濟といふ概念に於ける國民といふ規定は心理的にしか問題にされてゐない。そこに我々は國民經濟を利己心に對して公共心等々によつて心理學的に基礎づけようとした歴史學派の傳統をみる。

次にシュモラーは國民經濟が精神的に統一されてゐるのみならず、分業及び交通によつていはゞ經濟的に結合されてゐる面をみる。

「商品及び勤勞に對する自由な國內市場・移轉の自由・國民的分業・今日の交通機關は同一國家の諸個別經濟を今や、嘗つて近隣の經濟のみがさうであつた樣な仕方で、結合して來た。相似た絲が今日既に國家を遠く越えて一の世界經濟を生み出してはゐるが、然しそれらの絲は國內に存在するものよりは遙かに弱い。國民經濟が今日なほ主要なものである。今後世界經濟が存在するであらうかどうかは未定である。その場合には恐らく用語も變るであらう。」

國民經濟を統一してゐると同じ契機による世界經濟の成立をみてゐるのは正しい。然し世界經濟の契機も單に國際的な分業及び交通だけではなく、國民經濟に於けると同樣に、法律其他の國際施設及び人類精神等が考へられなければなるまい。それはともかく、歴史學派の世界經濟に對する態度は一般に冷淡であつた。然し國民經濟

の成立は同時に世界經濟の成立なのであつて、世界經濟に媒介されぬ國民經濟は何處にも存在しない。勿論世界經濟の中に國民經濟を解消して了ふのは誤謬であるが、國民經濟のみをみて世界經濟の存在を疑ふのもそれに劣らず誤りである。歴史學派の國民經濟概念も實は世界經濟の存在を前提して初めて得られたものであつたと考へねばならぬ。たゞ歴史學派の支配的な時代にはドイツが積極的に世界市場を目ざして進出することが少く、その努力は先づ國民經濟の確立と發展に向けられた所から、彼等は國民經濟のみに注目したのである。而して彼等は國民經濟といふ概念で資本主義經濟を把握しようとしたのであるが、それが國民經濟の側面だけから把握しつくされると考へてゐたとすれば重大な誤謬である。資本主義經濟は同時に世界經濟の側面をもつからである。

最後に、國民經濟の今一の統一契機は法律其他の國家施設である。

「分業と交通とによる自由な結合に、統一的な經濟法及び國家的經濟施設による法律的並に組織的結合が加はる。統一的な商業・工業及び農業政策、統一的な租稅・關稅及び財政組織、國家的な貨幣並に信用制度、國債並に地方債制度、國家的な軍隊學校・教育及び救貧制度、鐵道・運河・航路による國家的交通制度、國家的植民地、國際條約、――總てこれらの施設は今日總ゆる個別經濟を未だ曾つて無かつた樣な仕方で支配し、それを『國民經濟』の從屬的な構成分たらしめてゐる。」

「國家と國家行政は共に常に國民經濟の制度である。近代的國家施設なくしては國民經濟なるものは考へ得られない。」

歴史學派の特色は國家と經濟との離すべからざる關係を認識した點にあると言つてもよい。蓋し國家はそこでは所謂文化國家と理解されてゐるのであるから、一切の國民的なもの・文化的なものは國家に於て捉へられ、國民經濟の本質は國家を地磐とする所に見出され得るからである。

右の如く近代經濟制度は國民的な諸契機によつて統一されてゐる。そしてこの國民的な統一の側面からみる場合、それは一の全體をなしてゐる。それが國民經濟である。歴史學派はかう考へたのである。而して特に舊歴史學派は國民經濟を有機體とみることによつてその全體性を把握したが、シュモラーの段階に於てはそれが譬喩に過ぎないことが理解されて有機體說は淸算された。然し國民經濟を國民的に統一された一の全體とする考へ方は終始一貫して歴史學派を特徵づけてゐる。[2] シュモラーは國民經濟を定義して書いてゐる。

「我々は國民經濟を一國家の內に存在する一部分は相並び・一部分は相重なり且つ絡みあつてゐる諸個別經濟及び諸團體經濟——國家財政をも含めて——の總體と定義することが出來る。我々は國民經濟の中に一國民の經濟行爲の總體をみる、そしてその總體は我々に對してその國民の經濟的社會的施設並に制度の統一的體系として現はれる。その體系が統一的な心的並に物的原因によつて支配され、その全部分が緊密な相互作用の關係にあり、且つその中心機關が總ての部分に對して顯著な作用を及ぼす限り、我々はその體系を諸部分が獨立してゐるにも拘らず一の統一的・實在的全體とみるのである。」

歴史學派は右の如く國民經濟を國民的統一的全體であると考へたが、歴史學派の批判者メンガーはその全體性に疑を懷いた。我々はメンガーの見解を吟味することによつて歴史學派の見解をよりよく理解し得ると同時にその抽象面を指摘するための手がゝりを與へられるであらう。

三

メンガーは國民經濟といふ言葉を二樣に解し、嚴密な意味に於ける國民經濟と普通の意味に於けるそれとを區別する。[3] 先ず前者について。

2) 拙稿、ロッシャーに於ける國民經濟の意義、經濟論叢、昭和十年五月；ヒルデブラントに於ける國民經濟學の課題、同上、昭和十一年十一月；出口勇藏氏、カール・クニースの國民經濟學、同上、昭和十年九月。

3) Carl Menger, Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften, und der politischen Oekonomie insbesondere, Leipzig 1883, S. 232–35. 戸田

「本來の嚴密な意味に於ける國民經濟は(例へば多くの社會主義者達の計畫せる制度に於けるが如く)全體として考へられた國民 das Volk, als Ganzes gedacht の欲望を經濟事情に即して出來るだけ完全に滿足するといふことが眞にその目標であり、總體としての國民 das Volk in seiner Totalität が(直接にであらうと或はその代表者 Funktionäre を通じて間接にであらうと)眞に經濟主體であるならば、そして最後に全體として考へられた國民が現存する財を右の目的のために實際に支配し得るならば、存在するであらう。」

即ち嚴密な意味に於ける國民經濟とは、國民全體が眞實の經濟主體として意識的に國民全體の欲望を眞實の意味に於ける國民の富を以て出來るだけ完全に充足する所の經濟である。即ち眞實の國民共同經濟である。然しながらかくの如き嚴密な意味に於ける國民經濟の諸條件は言ふまでもなく現實の國民的社會關係の下に於ては滿されてゐない。メンガーは續けて書いてゐる。

「我々の現在の社會關係の下に於ては國民乃至その代表者そのものが經濟主體ではない。むしろ眞實に經濟主體であるのは個々の單獨經濟及び共同經濟の指導者である。そしてこの經濟主體の目標は大體に於て總體としての國民の財に對する需要の充足ではなくて、彼等の財に對する需要乃至は一定の他の自然人又は法人の財に對する需要の充足である。最後に現存する經濟手段もまた全體としての國民の欲望を確保するに役立つのではなくて、一定の自然人又は法人の欲望を確保するに役立つに過ぎない。」

メンガーが現實の諸單獨經濟が原則として欲望充足をその目標としてゐるかの如くに解してゐるのは誤りである。然し嚴密な意味に於ける國民經濟即ち眞實の國民共同經濟が現實に存在しないことを指摘してゐるのは全く正しい。そして、歷史學派が國民經濟といふ概念によつて問題にしてゐるのは近代資本主義經濟に外ならない限

武雄氏譯、社會科學の方法に關する研究、245-50頁。岩野泰次郎氏外譯、社會科學方法論、225-30頁。

り、それが嚴密な意味の國民經濟であり得ないことは言ふまでもない。

そこでメンガーは歴史學派の考へてゐる樣な普通の意味に於ける國民經濟を、「一國民に於ける諸單獨經濟の總和」、又は「諸經濟（諸々の單獨並に共同經濟）の複合體（コンプリウエオーン）或は・さう謂ひたいなら・有機體」と解する。それは決して嚴密な意味に於ける國民經濟ではなく、それ自體「一つの經濟」、卽ち「國民が欲望し經濟し且つ消費する主體である所の一大個別經濟」ではない。然し彼はこの意味の國民經濟も「孤立した諸個別經濟の並立したもの」ではなく、諸個別經濟は交易によつて結びつけられてゐると考へる。

「あらゆる人間の共同體から引離された個人のみならず、一國民の諸成員も――それ以外に如何なる關係にあらうと――互に財を交易し合ふ關係にない限り、孤立經濟の現象を示し得るのであるが、かゝる狀態に於ては普通の意味に於ける『國民經濟』も存在しないであらうといふことは殆んど說明を要しない。」

かくしてメンガーは所謂國民經濟を諸個別經濟の複合體とし、その複合體の最も重要な、否、本質的の紐帶を交易に求める。勿論メンガーも國家施設によつて個別經濟が統一される面を認めはする。然し交易關係によつて個別經濟の複合體は既に成立してゐる。國家はいはゞ外からその複合體に働きかけるといふ風に考へてゐる。それはともかくメンガーが問題にしてゐるのは國民經濟の統一契機が何であるかではなくて――而も彼はこの問題に於て歴史學派が重視した國民精神による統一を全然無視してゐる――、それらの契機も結局嚴密な意味の國民經濟を實現し得ないといふことである。その論證は次の如くである。

「從來經濟的に孤立してゐた多くの人々が互に財を交易し合ふ關係に入りこむからといつて、個人的な經濟上の目標や努力を

斷念することがなければ、(從つて實はその個人的利益を從來よりも合目的々に追求せんとするに過ぎないのであるならば)、彼等の從來の孤立經濟は一つの共同經濟に轉化するのでもなければ、それに一つの共同經濟が新しく附加はるといふのでもない。從來の孤立經濟は右の事實によつてむしろ一の組織を與へられるに過ぎない、成程それらはその組織によつて孤立經濟としての性格を失ふけれども、然しそのことによつて單獨經濟(Singularwirtschaft)としての性格は斷じて失はないのである。單獨經濟としての性格が失はれるのは、凡ゆる經濟主體が彼の個人的な經濟上の目標並に努力卽ち彼の經濟を斷念し、社會の總ての成員の需要を出來るだけ完全に充足するといふことが全經濟主體の共通の目標となる場合に於てゞある。この場合にのみこゝにいふ單獨經濟は消滅してその代りに共同經濟が現はれる。これに反して、諸々の經濟主體が彼等の經濟的努力の一部分のみを先きに考へたやうに共同經濟的方法で以て組織し、其他の部分については單獨經濟をそのまゝ維持して行くならば、從來の單獨經濟の外に一の新しい經濟而も共同經濟が現はれることになるであらう。そしてこれらの人々の內部で、更にその一部の人々のみを含む共同經濟が形成され得ることは自ら明らかである。現在國民經濟と呼ばれてゐるものは、極めて樣々の種類の單獨經濟と共同經濟との組織體であるが、本來の意味に於ける國民經濟ではなく、その總體性に於ては一般に一の經濟ではない。」

「大抵の國の政府が人民の經濟的事項について實行してゐるか、又は實行せんと考へてゐる助成作用もまた上述の事實を少しも變更し得るものではない。卽ち經濟的努力に對する第三者の助成はそれ自體獨立の經濟とみらるべきものでなく、且つ個別經濟又はその複合體が何らかの權力によつて育成され奬勵されるといふ事情は、その權力が如何なる種類のものにせよ、決してそれらの個別經濟又はその複合體をして統一的な經濟たらしめるものではないのである。從つて政府が國民の經濟に對して行ふ所の助成活動はそれ自體國民經濟とは考へられないし、またそれは個別經濟の單なる複合體を嚴密な意味の國民經濟に形成することも出來ない。のみならず、政府の助成作用は統一的な經濟的全體と考へられた國民の欲望の保證を目的とするものではなく、諸個別經濟の複合體——それは決して嚴密な意味の國民經濟ではない——の繁榮を目的とするに過ぎないことは言ふ

までもない。

自己の需要の保證に向けられた政府の活動(國家財政)は疑ひもなく獨立の一經濟であり、政府は實際に經濟する。然し財政は、その總體が通常『國民經濟』といふ表現で示される所の諸個別經濟の複合體の一構成分に過ぎず、決してそれ自體一の國民經濟なのではない。」

「要するに、一國民中の諸個別經濟が互に交易するといふ事實も、又一國民に於ける權力者が總體としての諸個別經濟の助成を目的とする活動を展開するといふ事實も、更には一國家の嚴密な意味に於ける財政の存在も、一國民中の諸個別經濟を國民の統一的經濟即ち本來の意味に於ける國民經濟に作上げることは出來ない。普通國民經濟といふ表現で示される現象は諸個別經濟の一の組織された複合體、一のより高き統一にまで結合された多數の諸經濟に過ぎず、それ自體嚴密な意味に於ける一の經濟ではないのである。[4]」

歴史學派の問題とした樣な國民經濟が嚴密な意味の國民經濟でないことをメンガーが指摘してゐるのは全く正しい。屢々述べた如く歴史學派の所謂國民經濟は近代の資本主義經濟のことであり、資本主義經濟はメンガーの規定してゐる樣な嚴密な意味の國民經濟ではない。そこでは國民全體が眞實の經濟主體として意識的に一の共同經濟を營んでゐるのではない。即ちそれは眞實の國民共同經濟ではなくて市民的國民經濟である。そして市民的な國民經濟は確かにメンガーの理解した如く一國民に於ける個別經濟――共同經濟もまた個別經濟化される――の總和といつた面をもつ。從つて歴史學派特に舊歴史學派の代表者達が國民經濟を端的に共同經濟であるとしたのは正しくない。例へばロッシャーが、國民經濟は總體としての國民欲望を國民の總活動によつて充足する計畫的活動であり、而もそれは最少の國民犧牲によつて最大の國民の富が獲得されるための意識的活動である。而し

4) Vgl. a. a. O. S. 44, 86-87. 戸田氏譯、71頁、110-11頁。岩野氏譯、59頁、96頁參照。尙メンガーは所謂國民の富についても(Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. Wien 1871. S. 74-76. 安井琢磨氏譯、國民經濟學原理、69-71頁)、又所謂國民資本についても(Zur Theorie des Kapitals, 1888. The Collected Works of Carl Menger, Vol. III. Kleinere Schriften zur Methode und

て計畫的活動は意志を前提とするが、國民經濟の意志性は慣習・就中法律其他の國家施設にみられる、としたのはそのまゝは受取り難い。[5] にも拘はらず所謂國民經濟は市民的ではあるにしてもなほ國民經濟なのである。所謂國民經濟は交易によつて結合された個別經濟の單なる總和といつたもの以上に國民的に統一された一の全體でなければならない。然らばこの點に關してメンガーは歴史學派と如何なる相違をもつか。

既に述べた如く、メンガーは國民經濟の統一契機を殆んど專ら交易に於て考へる。國家活動を考へぬではないが、それはむしろ第二次的である。そしてシュモラーが國民精神として捉へた樣な國民經濟の統一契機については、これを全然問題にしてゐない。否、彼はさうしたものを理論的國民經濟學に持出すのを拒否してゐる。

「『國民經濟』といふ現象は決して國民そのものゝ直接の生命表現 (unmittelbare Lebens-äusserungen eines Volkes als solches) 『經濟する國民』(wirtschaftendes Volk) の直接の結果ではなくて、國民內部の總ゆる無數の個別經濟的努力の合成果である……。『國民經濟』の諸現象は、丁度それが我々に對し現實に個別經濟的努力の合成果として現はれるが如くに、理論的にもこの觀點から解釋されなければならない。」[6]

「國民經濟は……個別經濟に類似した形體であり、從つてその現象は一の『經濟する國民』の表現と觀られ、個別經濟の現象との類比によつて說明されねばならぬ」といふ見解は誤つてゐる。「國民經濟の理論的理解を、それによつてのみ複雜な現象の理論的理解が得られる方法によつて、卽ち集團現象を組成してゐる諸々の個別現象の本質と內的聯關に沒頭することによつて求める代りに、右の見解の代表者達は『經濟する國民』を擬制しその『生命表現』を研究する。交通によつて結合された諸個別經濟の機能（諸個別經濟の接觸）の明白な總結果である所の國民經濟の諸現象を、同樣に明白な國家的並に倫理的影響を顧慮して、その構成要素から說明する代りに、彼等は國民經濟の諸現象を國民精神の直接の表現 (unmittelbare Äusserungen des Volksgeistes, der Volksseele) として、解釋せんとするのである……。」[7]

Geschichte der Volkswirtschaftslehre. S. 167.) 同樣の考へ方をなしてゐる。

5) 拙稿、ロッシャーに於ける國民經濟の意義、經濟論叢、昭和十年五月。

6) Untersuchungen. S. 87. 戸田氏譯、111頁、岩野氏譯、96頁。

7) Zur Theorie des Kapitals, 1888. Kleinere Schriften. S. 169-70.

有機體說が批判されてゐる限りに於ては正しい。又國民經濟が「國民そのものゝ直接の生命表現」でないとか「國民精神の直接の表現」でないとかいふことが、それが眞實の國民共同經濟でないことを言はんとしてゐるものである限りに於ては正しい。然し彼は國民經濟が、直接でないといふならば、關接にでも國民そのものゝ表現であることを認めたのであらうか。一體彼は國民そのものと國民經濟との關係を如何に考へたのであらうか。彼も具體的な國民經濟が國民生活の一部であり、國民生活の具體的現象が、無數の共働要因の結果であることを認める。然しこのことは歴史にとつてこそ重要であれ、理論的國民經濟學特にその精密的方向にとつては重要なことでないとされる。精密的研究は專ら國民生活の經濟的側面のみを精密に理解せんとする。國民經濟の非經濟的要因卽ち國家的並に倫理的影響等々――或は國民精神といつたものもこれに含めて考へられると言ふかも知れない――は實在論的研究に於て顧慮されるに過ぎぬといふ。[8] 問題は二の研究方向の關係にあり、特に精密國民經濟學にあるが、國民そのものに關はることなくして如何にして國民生活の經濟的側面を理解し得るといふのであらうか。

ともかく、メンガーが國民經濟を規定するに當つてそれが歴史的社會的實體としての國民によつて作られたものであることを全然顧慮してゐないことは明かである。國民とは彼に於ては諸經濟を總括するに際して必要な空間的限定の意味をしかもつてゐない。この意味に於て彼の國民經濟の概念は全く原子論的だと言はなければならぬ。[9]

四

8) Untersuchungen. S. 60 ff. 戸田氏譯、87頁以下。岩野氏譯、37頁以下。
9) メンガーに對する原子論といふ批判は彼の敢へて痛痒を感ずる所とはならなかつた。彼は複雜な現象を單純な要素に還元することが原子論として非難されるとして、その非難を誤解だとした。(Untersuchungen. S. 82 ff. 戸田氏譯、107頁以下、岩野氏譯、92頁以下)。然し複雜な現象を構成する單純な要素を

國民經濟は歴史的社會的實體としての國民によつて作られたものである。國民は自分自身を作ると同時に國民經濟を作つて來たのである。この意味に於て、國民そのものは飽くまでもその主體でなければならない。同樣に、歴史學派が、そしてメンガーも、國民經濟は國民生活の經濟的側面或は經濟的國民生活であると言つた場合、國民は主體的に考へられてゐたのでなければならぬ。從つて國民經濟は、メンガーではなくて、歴史學派の方向に、主體的に把握されなければならないと考へられる。

先づ國民の自己形成活動によつて國民經濟が成立したといふことは經濟生活就中生産及び交換が國民的範圍にまで擴大されたといふことである。その限り經濟生活の國民共同經濟的側面が實現されて來たものと考へられ得る。そしてその限り國民そのものが一の經濟主體であると考へなければならぬ。メンガーは所謂國民經濟に於ては個別經濟のみが主體であつて、國家其他の團體も個人と同一平面に於て個別經濟としてのみ主體であり得るに過ぎないと考へてゐる。然し例へば、國家が諸個別經濟の複合體を客體として助成作用を展開するといはれる場合、實はその複合體は國家に於て自己の主體性を獲得してゐるのではないのか。國家は國民經濟に對立する單なる第三者ではなくて、歴史學派が主張した如く國民經濟の機關としての機能をもつ。個別經濟は個別者であると同時に、國家に於て自己を全體にまで高める。國家意志は個別經濟のそれを超えてはゐるが、而も全體にまで高められたそれの意志である。その限り個別經濟は單に個別者として經濟主體であるのみならず、その全體としてもまた經濟主體であり、全體としての個別經濟の活動を助成することを目的とする意識的活動を展開する。そしてかゝる國民全體の經濟活動の結果が國民の富である。この意味に於て國民全體がシュモラーの言つた如く半ば

何とみるか、そしてその要素が如何にしてその現象を構成すると考へるかゞ問題なのである。そして全體を部分の單なる總和とみる立場が原子論である。即ちメンガーが國民經濟を單に個別經濟の總和と考へてゐる點こそが原子論的だと批判されなければならないのである。

尙、メンガーが國民的なものを考へるに當つて困難を感ぜざるを得なかつ

意識的半ば無意識的ではあるにしても、ともかく一の經濟主體であり、國民經濟は一の共同經濟である。

然しながら資本主義經濟に於ては、個別經濟は右の如き共同經濟的側面と同時に完全な獨立性を獲得してゐるのであつて、國民全體の意識的活動も個別經濟――總體としてのそれであるにせよ――の活動を助成することに向けられ、國民の富は私有財産として存在する。即ち國民全體的なものは自己を疎外して却つて個別的なものとして存在する。而してこゝに所謂國民經濟が市民的と特徴づけらるべき理由があるのである。かくして國民經濟は國民共同經濟と個別經濟の複合體とに分裂して現はれる。メンガーは嚴密な意味の國民經濟即ち國民共同經濟と普通の意味の國民經濟即ち個別經濟の複合體とを無關係なものとし、後者こそが現實の國民經濟であつて前者はそれに關りなきものだと考へた。然し國民共同經濟は現實の國民經濟の中に、一部分は現實に、一部分は潜勢的に、存在するのである。從つて國民經濟の概念は國民共同經濟と個別經濟の複合體との統一に於て捉へられなければならない。といふのは國民經濟が單に財政等の共同經濟と諸個別經濟との總和だといふ意味ではなくて、個別經濟の複合體も實は國民共同經濟の自己疎外的形態として把握されなければならないといふ意味である。

要するに、國民經濟は國民が作つたものであるといふ意味に於て、又一部分現實に存在する國民共同經濟に於ては國民全體がその限り現實に經濟主體であるといふ意味に於て、更に個別經濟の複合體は國民共同經濟の自己疎外的形態であるといふ意味に於て、國民全體が國民經濟の主體であると考へられなければならない。歴史學派が國民經濟を國民的に統一された一の全體であると言つたのもこの意味でなければならないと考へられる。

然しながら歴史學派も眞に國民經濟を主體的に即ち國民的實踐的に把握してゐたとは考へられない。或る場合

た歴史的社會的事情については、拙稿、カール・メンガーの社會政策學派批判、經濟論叢、昭和十三年十月、參照。

には有機體說的な考へ方が支配的であつたし、それが淸算された場合に於ても、彼等は國民經濟を單に過去から理解しようとしたに過ぎなかつたからである。彼等は單に歷史的觀點に立つてゐたゞけで、歷史的實踐的觀點に立つてゐたのではなかつた。こゝで歷史學派が實踐的でなかつたといふのは、勿論彼等が市民的國民經濟の成立及び發展に對して實踐的な意圖をもち役割を果したことを否定しようなどゝいふのではない。市民的國民經濟の成立及び發展によつて可能となつたものゝ實現を規準として言ふのである。又我々は彼等が立つてゐた歷史的段階を充分に顧慮してこの意味の實踐的な立場に立ち得なかつたことを性急に非難しようとは思はない。唯歷史的實踐的な立場に於てゞなければ國民經濟の眞に具體的な把握は不可能であると言ひ度いだけのことなのである。

先づ彼等が國民經濟を强調しつゝ國民とは何であるかを明確に規定することが極めて少かつたことが注意される。勿論彼等が國民といふものを大體に於て血と言語と風習其他の歷史的傳統によつて結合され、國家組織をもつた・文化擔當者としての人間の集團を考へてゐたといふことは爭はれない。そしてかうした國民の文化生活の一側面が國民經濟だと考へてゐた。然し國民經濟が國民によつて作られたものであるといふ側面は大して彼等の關心を惹かなかつた。主たる關心の對象となつたのはむしろ國民經濟が國民的に統一されてゐる側面であつた。作られた國民經濟が如何に國民を作りつゝあるかといふことよりは、作られた國民經濟が公共心又は國民精神等によつて統一されてゐる側面を心理學的に解釋することの方が重要であつた。

而して彼等は國民經濟が國民的統一的全體であるとすることによつてその共同經濟的側面を捉へてゐた。その限り國民經濟を卽自的な國民共同經濟と個別經濟の複合體との統一に於て理解してゐたと言ふことが出來よう。

然し個別經濟の複合體を國民共同經濟の自己疎外的形態とは解しなかつた。從つて國民經濟の統一的全體性を强調しても國民經濟の概念は結局メンガー流のそれから大して隔りのあるものではなかつた。「諸個別經濟及び諸團體經濟――國家財政をも含めて――の總體」といふシュモラーの國民經濟の規定と、「諸經濟（諸々の單獨並に共同經濟）の複合體」――この場合にも勿論財政は含まれてゐる――といふメンガーの規定との間に、我々はどれ程の差異を發見し得るであらうか。國民經濟が共同經濟であると言はれる場合にも、現實に對する批判的なものは含まれてはゐなかつた。即ち現實の自己疎外的側面は全然看過されてゐたのである。

更に、國民經濟が益々意識的統制的になつて行くことが認められたにしても、國民經濟は國民共同經濟が實現されて行く過程に於ては觀察されなかつた。歴史主義にとつては、一國民の個別經濟が國民的に統一されてゐる側面を論證することが出來れば、それで充分だつたのである。そしてそのことは實は國民全體が國民經濟に支配されることを止めて、その支配者となりつゝあることの即自的形態であることを理解しようとはしなかつたのである。況んやそれを國民全體の立場に於て實現しようとはしなかつた。かうした非實踐的な立場に於ては國民經濟が國民そのものから主體的に把握されることが出來ず、國民經濟の自己疎外的側面即ち市民的側面は問題になり得なかつたのである。

要するに、歴史學派が各國民の近代資本主義經濟を國民經濟と概念し、國民的に統一された一の全體と觀たのは正しかつたが、更にそれをつき進めて國民經濟を國民的實踐的に、從つて國民全體の立場から主體的に考察することが必要ではないかと考へられる。